大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

地球規模の枠組みのなかで「国際的フェミニズム」を教える(下)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: バーロウ, タニ・E メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004956

地球規模の枠組みのなかで「国際的フェミニズム」を教える（下）

タニ・E・バーロウ

4．エコフェミニズム、人権フェミニズム、地域現地主義に替わるオルタナティヴを教える

学問的な議論では、或る主張の弱点を指摘した評者は、問題の再概念化を追究する。その道筋をどう読みとるかを、私は学生に教える。しかし私の目的には2面がある。1つは、議論を地球規模の枠組みのなかに置きなおして、アメリカ合州国式の「国際的フェミニズム」というイデオロギーがもつ影響力を弱めることである。もう1つ私がしなければならないのは、より複雑で、より体制順応的でないフェミニズムの理論的実践について、私自身がどういう展望をもっているかを学生に示すことである。以下に挙げるのは、学生たちが関心を向けてほしい3種の仕事だ。第1に、重要テクストを組み合わせて読解作業を計画し、それらの問題性に注意を促す。学生にとってのこの難局は、当然ながら毎年開講のたびにくりかえされる。第2に、この講義のシラバスは或るひとつの立場に立ち、それはジェンダー化された歴史を記述するいくつもの方法をつくりだそうというものだが、それをどのように行なうか、また、なぜ歴史を記述することが「フェミニズム理論」に替わるオルタナティヴになると私が考えるのかを簡潔に示す。シラバスの立場は明示的なものではなく、学生がシラバス全体のつながりを見て初めて、そういうものとしてセミナー討論のなかで浮かびあがってくる。第3に、ポストナショナル・フェミニスト[40]がつくる道義的共同体についての要点を私が示して締めくくる。

ノエル・スタージョン著 *Ecofeminist Natures: Race, Gender, Feminist Theory and Political Action* が刊行されるや、私はこの著作を、必読文献リスト（それまで挙げていたのは、ジョヴァンナ・ディ・チロの論文 'Nature As Community'、およびダナ・ハラウェイの論文 'A Cyborg Manifesto'）に付加した。いずれの仕事も、従来からの基礎的なエコフェミニズムから別の方向へと転換する手段となる。[41] スタージョンの本は新

しい論点を提起していて、私にはありがたかった。第1に、系統的な歴史記述のプロジェクトとはいかなるものか、また現代を研究する歴史家はどのように歴史についての議論を組み立てるのかを示してくれている。スタージョンは、学生たちがすでに読んだエコフェミニズムのごく基本的な文献を、テクストと制度をめぐる政治学の諸問題と関連づけている。第2に、スタージョンは、ガヤトリ・スピヴァクの議論をよく知る理論研究者であれば馴染みのある、苦しい立場について論じている。つまりエコフェミニズムは、スタージョンの議論によるなら、その核心においてエッセンシャリズム的であるが、それでも賭かっているもの（私たちの地球）が高価なので、フェミニストはエコフェミニズムを正面から真剣に受けとめなければならない。第3に、スタージョンは、エコフェミニズム運動の歴史を系統立てて論じながら、エコフェミニズムの理論と実践のなかの人種主義を詳細に指摘している。興味深いことに、ここで学生にとって衝撃なのは、スタージョンがエコフェミニズム理論は国を越えた（transnational）市民の場となりうるとする立場に立つことである。スタージョンが言うその可能性は、フェミニズムにおける国際性を考えることに含まれる危機をいっそうこみいったものにする。というのは、学生たちにしてみれば、望みも実りもない企図としてすでにバツをつけたものが、スタージョンの主張に含まれるからだ。

スタージョンはまた、「国際的フェミニズム」の思想を形成しているのは誰かという点についても議論をしている。彼女が見取り図を描いて見せるように、国連／アメリカ合州国が制度的、財政的に下支えする構造（特に、GAD、WED、GED、UNEP、SWAGSD、FLS、WEDO、UNCEDなど[42]）の網の目が、国レベル／国際レベル（national/international）で張りめぐらされている。このことを論じるスタージョン書中の1章‘Ecofeminist Natures and Transnational Environmental Politics’はたいへん有益で、そこで焦点があたっているのは、環境保護政策、持続可能な発展、そして発言／代表に関する国レベルの政治学と国際レベルの政治学の協力といった諸問題についての、国連の財政支援を得て開催されるさまざまな会議である。[43]新しい開発理論の領域で進められる、女性こそは自

然資源の本来的な管理者であるという議論が、どのように環境問題を女性問題に結びつけるのか、また人口抑制政策を推進するフォード財団や世界銀行のような組織がする努力をあと押しするために、環境問題がどのように使われているかをスタージョンは説明している。学生にとって目からウロコが落ちる思いがする主張の筆頭は、おそらくスタージョンの次のような結論である。「自然環境をグローバルなものとする議論は、かつてグローバルな民主主義をと論じた冷戦時代の修辞に替わるものとして使われている」。[44]こうしてスタージョン、ハラウェイ、ディ・チロが明示するのは、「国際的フェミニズム理論」は無邪気な試みではないというだけにとどまらない。実はかなりの資金提供を受けて国際的局面で展開される国家的利益伸長を図る政治学であり、それはアメリカ合州国のフェミニズム諸機構と国連の開発事業をとおして実行されている。[45]

うまくいかなかった私の戦略としては、世界銀行やフォード財団といった機構が国際的な女性の権利や各国地域現地のフェミニズムの計画を推進する際の理論的主導権を最終的にどうとりこむかを示そうというものだった。1996年、1998年の世界銀行のウェブ頁、ならびにフォード財団の1993－1995年の目標設定、年次報告、補助金給付記録をダウンロードして、それらを注意深く読み、どのように理論と開発行為が密接に結びついているかを把握しようとした。結局、ジェンダーに敏感な開発計画が女性に狙いを定めるのは、女性を資本主義的開発政策の受け皿としてのことだというのが、私たちが出した結論である。学生たち自身がそれらの報告書から直接読みとるのは、NGO 領域ならびに市民社会／公的領域への資金投入のありようを見ると、統治管理と、社会正義の推進、そして社会サービスのグローバル化が互いに重なりあっているということだ。膨大量の計画や構想が立てられ、その結果、世界中のジェンダー研究・女性学研究機構に資金提供されたことに学生たちは驚嘆する。この調査は学生たちにとって学ぶところ大であるが、時間がかかりすぎるのが難点である。この問題に正面からとりくめる新しい材料は、いまのところまだない。それに私としては、こうした表面的な調査からおおざっぱな結論を引きだすのはいい気分ではない。

人権に関する主張は、学生にとって最も問題性の少ない、それでいて最も論じるのが難しいものである。私は、人権の主張に反対するようにと教えることはしない。そうではなく、「女性の権利は人権である」という論の問題性をはっきりと見えるように提起している。まず1次資料である「現地報告」を提供する「国際的フェミニズム」の場である国連の会議を論じることから始めて、次にイギリスのテレビ局チャネル4で放映された番組『死の部屋への帰還（Return to the Dying Rooms)』(1995年）を見せる。このドキュメンタリーを見ると、いったいどうしたら中国孤児院での女児殺しが、すべての女性にとっての人権侵害となるのかと考えさせられる。その疑問から、さらにいくつもの問題について考えることになる。まずクラスでは、「国際人権規約」を読むのだが、学生たちは先のドキュメンタリーの論調がこれとよく似ていることに驚く。学生たちの多くがとうの昔に合州国人権法の批判的考察をしたはずだが、それでもその考え方は彼らの政治的無意識の一部となっている。次に私たちは、表現の政治学について討論する。おもしろいことに、毎年多くの学生がこのビデオを非常に不快だと感じる。このドキュメンタリーのセンセーショナリズム、暗黙のうちに前提されている人種主義、そしてとりわけ、激しい非難をこめて撮影する「よそ者」調査者の態度を、学生たちは批判する。[46] いまドキュメンタリーで見たのは、毎日のようにニュースで報じられるだれかの死と変わらないことを忘れないようにと、私はいつも学生たちに言っている。このドキュメンタリー製作者たちのやり方に対する学生たちの否定的な反応は、実は彼ら自身の恐怖をなんとか抑えこむための一法ではないかと私は思っている（その恐怖は、このドキュメンタリーをなんども見た私自身がいつも感じるものでもある)。しかし学生たちが人権についてすでに抱いている前提はたいそう深く、彼らの自己意識の不可欠な構成要素とまでなっているので、このドキュメンタリー・ビデオを批判しながらも、それと同じ語法でしか人権を論じることができないと気づく。

この点について、インダーパル・グルーワルが‘On the Global New Feminism and the Family of Nations’[47] で論じている。チャネル4のドキュメンタリーを見せたすぐあとに、私はこのグルーワル論文とリン・トマ

ス論文 ‘“Ngaitana (I Will Circumcise Myself)”: The Gender and Generational Politics of the 1956 Ban on Clitoridectomy in Meru, Kenya’[48] を使うことにしている。複雑な歴史事象を単純な解決策でかたづけようとする学生たちの傾向に水を差すためだ。『死の部屋への帰還』はむろん悲劇である。しかしこのドキュメンタリーが孤児である少女の死を人権侵害の問題としか位置づけていないため、その語りは、複雑な悲劇を、男性と国家に認可された女性への暴力と、女児を忌避する中国人の「文化に根ざす」嫌悪とのみが招いた結果として単純化している。この意図的な女児虐待に対する唯一の解決策として暗に示されているのは、国際的介入（つまりアメリカ合州国を初めとする西洋諸国が中国製品をボイコットすること）であり、それによって、最後に残った現存の共産主義政治勢力の、文化生活と強大な体制をどうにかしようということである。このあとに続けてトマスとグルーワルの論文を読むと、学生たちは中国に関する自分たちの知識は不十分なもので、人権の主張がこのドキュメンタリーの伝える現実の残酷さに改良をもたらすなどと言えるだろうかと疑うようになる。暴力的事例（つまりこのドキュメンタリー・フィルム）の次に、女性同士が身体的損傷行為を行なうなかで女性がもつ権限をとりあげるトマスの論文を学ぶと、学生は「女性自身の能動性」についての関心を口に出してもよいという気になるようだ。この段階で私がよく学生たちに尋ねるのは、なぜ「よその女性の」クリトリスの問題にそうまで関心をもつのかということである。[49] この質問は、彼らにとって無視できないもののようだ。この点をさらに追究するために、ホマ・フドファーの論文 ‘The Veil in Their Minds and On Our Heads: The Persistence of Colonial Images of Muslim Women’[50] を読む。これは、女性の人権に対する侵害を、頭にスカーフをかぶる行為といきなり結びつけ、そこから「イスラムの女性たちは、その宗教によって抑圧されている」という例のフェミニズム式批判が出てくるという、換喩的論法の仕組みを批判的に解き明かしている。

ジャッキ・アレグザンダーとチャンドラ・モハンティ編集の本 *Feminist Genealogies, Colonial Legacies, Democratic Futures* は、国際的女性人権についての議論で提起されている主張を、そのままには受け取れなくなるよう

な追究をしている。[51] 編者による序文、モハンティ、ヘン、アレグザンダー、ショハトそれぞれの論文は、「ネーション」なるものが実際どのようにして「ネーション」とされるのか、ナショナルな線引きを決めている残酷な歴史的偶然性をそうと認識しないままに「国際的」観点でうちだされる意見とはどういうものかという問題を論じている。もちろん、この本を読むまでには学生たちはすでにラオの論文全体の入念な読解をすませ、私はラオ論についての分析を長々と行なっている。[52] シャーロット・バンチが 'Transforming Human Rights from a Feminist Perspective' でしている主張、すなわちフェミニズムの視点で人権概念を変えようとするとき、「その政治闘争の具体的な戦場は女性の身体である」という主張についてもとうに考察している。[53] つまりこのクラスでは、なぜ人権の主張が FGM、女児殺し、ダウリー殺人、その他の形態の法外な暴力にたいそううまくあてはまるように見えるのかを問うようになってすでに久しい。学生たちは、人種を越えて女性をつないでいるものは「女性の体」という具体的／身体的な領域であるといった観念を捨てる覚悟はできている。というのは学生たちは、非白人フェミニストが展開する差異の議論の価値を知るようになっているし、身体には社会的諸力が働いていることは次第にはっきりしてきているからである。歴史の圧力は、満足いく解決など望めない複雑な条件を能動的主体に課すことがあり、それらの条件にとりくめるのは意識の脱植民地化と脱帝国主義化の過程においてこそだという議論ができるように学生たちはなっている。私たちを条件づける身体と歴史という２重の拘束と、身体に施される変形に対する複雑な情緒的意味付与の問題を学生たちは論じる。

アレグザンダー／モハンティ編著の本（なかでも序文とモハンティ論文）に私は非常に多くを負っている。というのは、国際的人権フェミニズムがけっして使わない用語を、理論的問題に関するクラス討論で私が使えるようになったのは、この本のおかげだからだ。使えるようになった用語とは、「後期資本主義」「ネオリベラリズム」「帝国主義」「越境」「参加民主主義」「主権」「反資本主義」「覇権」などである。アレグザンダー／モハンティの議論（地球規模化した資本が女性抑圧の根源であるとする立場）と、ピ

ーターズ／ウォルパーの議論では概念化に違いがあって、別ものの主張になっている。それはなぜなのかを学生たちがわかるようになるには、おもしろいことに、討論を始めてからふつう数時間はかかる。

アレグザンダー／モハンティの本にとりくむ段階になって初めて、国際的フェミニズムに全面的にとって替わるオルタナティヴについての考察を私たちは始める。アレグザンダーとモハンティが丁寧な分析を展開しているのは、国家の態勢、イデオロギー的圧力、資本流出が国レベル／国際レベルでジェンダー社会に引き起こす対立について、また南の諸国の困窮労働者（男性よりも圧倒的に女性が多い）を締めあげる、国を選ばないグローバルな分業についてである。これに接することで学生たちは、オルタナティヴな地平があると感じはじめる。そうなったところで私が教えるのが、マリ・アナ・ジェイミズ・ゲレロの論文 'Civil Rights versus Sovereignty' で、これはたいそううまくいく。[54] この論文は、私たちがもつ主権の問題を国家的抑圧（学生たちにとっては、彼らが個々に有する市民権を保証している当の国家、つまりアメリカ合州国国家による抑圧が論じられている）に対抗する人民結集という文脈のなかに置いて論じるものだ。アレグザンダーとモハンティの本がしているのは問題の提示だが、そこから国際的フェミニズムに替わるオルタナティヴを示すことができるようになる。クラスもこの段階までくると、学生のなかになにかが起こる。国際化についての素朴な議論の重大な欠陥と思われることについて、学生たちが発言するようになるのはこのときである。

このクラスも残るは数週間というときにとりあげるのが、*The Challenge of Local Feminisms* における各国の地域現地主義という問題である。[55] これをアレグザンダー／モハンティとウィリアム・ロビンソン[56] による分析とともに読む。国際的フェミニズムとはなにか、それに替わるオルタナティヴにどんなものがありうるかという問題を、新しい枠組みで考えるに十分ななにかがクラスにみなぎるまでになるときもある。その点で最も役に立つ論文はオナー・フォード＝スミスの 'Ring Ding in a Tight Corner' だと私は思っている。[57] というのは、とてつもなく有意義な教訓を残しながら、それを教えた者は敗北者になってしまうといった状況について、読者

に考えさせる論文だからだ。フォード＝スミスが紹介する開発プロジェクトは成功例ではない。私がアレグザンダー／モハンティの本に所収の論文を使うのは、フォード財団の刊行物に見るお気楽な楽観主義に抵抗するためである。そのなかでも私が重点を置くのは、たとえばカナビラン／カナビランの論文 'Looking at Ourselves'[58] のような仕事だ。というのは、この論文で強調されているのが、奮闘のあげくに手にした達成と勝利ではなく、自己批判と部分的成功、思いどおりにならないなかで事を進める困難、そして世界銀行やフォード財団が成功の意味を決める最終的審判者となっている状況のなかで、「フェミニズム式の民主主義」などといったユートピア的なプロジェクトが占めるのはどういう位置かといったことだからだ。[59]

ここまで来ると、学生たちは当初の確信は捨てている。私の意見に最終的には同意しないかもしれないが、内省的姿勢とも言うべきものを身につけており、それこそはなにより価値あるものだと私は考えている。なにを読むにしても、適度な慎重さと批判的な疑いの姿勢で臨むようになっている。今年の学生は、バスウの本で言われている各国の「地域現地」なるものの問題性を認識するのにそう困難はなかった。ジョーン・スコット、コラ・カプラン、デブラ・キーツ編集の書 *Transitions, Environments, Translations: Feminisms in International Politics* が国際的フェミニズムに対する批判をそれとなく展開していて、仔細に読めば、「地域現地」というのが紛れもなく国際的フェミニズム・イデオロギーの一部をなすことが、学生にはすぐわかる。[60] スコットたちによる編著は「国際的フェミニズム」から「国際政治学のなかのフェミニズム」へと焦点を移していて、これは「フェミニズムの外部」というものがまちがいなくあるという認識だと私は考えている。フェミニズムとは、女性の体や「女性の体をめぐる身体的領域」といったところから立ち昇る自然なほとばしりではなく、正義と市民権についての特定の歴史性を有する主張である。スコットたちの本でもうひとつ有用な指針となる点は、女性、市民社会、国家社会主義、ナショナリスト的論法、翻訳といった、厳密な追究を経ないで使われている分析用語の問題を、この本のおかげでクラス討論のテーマにできることだ。こ

の本の論者たちは、同じと見える分析概念を共有するがゆえの面倒について徹底して論じている。たとえば、理論家たちが同じ語を使いながらも同じことを意味しないとわかるところまで議論のレベルを上げるために、翻訳のパラダイムを適用している。[61] この本の論者たちの目的は、ナショナル、アンチナショナル、インターナショナルのいずれでもなく、論者たちの立場をできるかぎり一般化して言えば、新局面でフェミニズムの領域を「政治学」として立てようということである。

これが大学院の演習であれば、私はアレグザンダー／モハンティ書とスコット書のあいだのずれについて問題提起するところである。アレグザンダー／モハンティの本は、非白人女性の労働力構成に関する反資本主義戦略を論じるもので、なにより第１の焦点は、貧困に追いやられてジェンダー体制の犠牲になった南世界の女性労働者にあるのは明らかである。スコットたちの本は理論的、学術的な指針であり、ここには世界のフェミニズム理論家が一堂に会している。ここで編者と寄稿者が同様に分けもつ前提は、フェミニズムとはヨーロッパ中心的で中流階級的なものということである。しかし、私たちの立場もまずはそこである。国際的フェミニズムのイデオロギーを危機的なものと受けとめ、そのイデオロギーを単純でない文脈のなかに置こうというのが、学部学生レベルのクラスでする私のプロジェクトだからだ。

私は歴史研究の教育を受けたので、ジェンダーの歴史を記述することが国際的フェミニズム理論に替わるオルタナティヴになるかもしれないというニュアンスを感じさせる副次的テーマをシラバスに書きこんでいる。実はクラス開始の第１週に、いくつかの重要語に言及し、以後の討論の指針になるようにしている。その最初が「フェミニズムの主体」である。フェミニズムにはそれをになう主体が存在し、その主体は意識的理性の部分でもあるし、歴史に由来する無意識の部分でもあるという多義性を言うために、私が学生たちに見せるのがマレク・アルラの本 *The Colonial Harem* に関連のスライドと[62]、類似の仕事である20世紀の写真ジャーナリズムないしは植民地民族学研究のテクスト５点だ。そのなかにはこの２、３年に出版されたよく知られるものもあり、女性を解放しようという国際的努力の

平板な決まり文句が、20世紀を通じてくりかえされてきたものであることがわかる。この最初の講義は感動的でもあるし恐怖でもあると学生は言っている。私がこれをするのは、1次資料や歴史的文書がどういうものかを把握してもらうためだ。しかしまた、学生たちがもつ「直接性／無媒介性」の感覚（これは第1週の話であり、学生たちはまだ「研究して解放してあげる」という姿勢でものを考えている）が、数世紀におよぶ植民地資料にあるのと同種のものだと警告するためでもある。この目的は、図書館／資料室とはその種の資料（フェミニズムの歴史的文書も女性人権の議論も含む）が汗牛充棟に集積する場所であることを、学生たちが忘れないようにと考えてのことだ。私のこの努力が大きく報われるのは、学生たちがユキコ・ハナワの論文 'Inciting Sites of Political Interventions: Queer'n Asian' を読むときである。この論文は、主体とは歴史が凝縮する場所であり、そこは政治的介入と社会的協働の瞬間がたち現われるかもしれない地点だという、ハナワの歴史研究者ならではの主張を展開したものだ。またハナワは、こうしてうちたてられたフェミニズムの主体が不確定な移りゆくものであることも言っている。[63]

国際的運動における差異の問題を扱ううえで、よりイデオロギー的でない、より学術的なアプローチに学生を向かわせるために、私が強調点を置く歴史記述に関わる次の論点が、議論のなかで知識の枠組みがどう決まるかを検証し、説明することである。これはダイアンヌ・ハガマンの本 *How I Learned Not To Be A Photojournalist* [64] を使うと、たいそううまくいく。この本は視覚表現の陳腐な定型のもつ働きを教えてくれる。写真ジャーナリズム的表現手法の従来の枠組みから一歩退いて、みずからを訓練しなおすことで、ハガマンは全体と部分、表現と社会的文脈、主体の意図とアーティストによる表現の相互関係を再考することが可能になった。このテクストの力は視覚的直接性である。議論の枠組みがどう決まるか、歴史研究者が議論の枠組みを決めるとき何をするか、についてこのあと学生たちが討論するとき、ハガマンの本は視覚的な参照点となってくれる。そしてネル・ペインターの論文 'Representing Truth' [65] を使って全面的に歴史学的な議論に入るときには、学生たちはもう「ソジュネ・トゥルース」とい

うイデオロギー的偶像を諦め、より危うく曖昧な、女性奴隷であった歴史上の人物を受け入れる覚悟ができている。トゥルースというイデオロギー性に満ちた偶像を、さほどドラマ性をもたない、より輪郭のぼやけた現実に取り替えることの意味を学生は懸命に考える。「敬愛すべき救済者たる黒人」というのは、男女いずれも含む黒人、白人双方のアボリショニストたちが或る歴史時点において協力してつくりあげた歴史性を帯びた像だと学生たちは考えるようになる。その像は、歴史資料に照らして再構築が必要なものであって、正義と快適さに満ちた世界で人種対立などなしで生きたいという学生たちの望みを投影できるイデオロギー的スクリーンだというだけではない。ジェンダーの歴史をどう記述するかというテーマを、演習クラスが終了するまでずっと扱いつづけるわけではない。しかし歴史的特定性の問題の提起は続ける。というのは、フェミニズムも「理論」なるものも万能ではなく、その力には限界があると学生たちに警告する以上、それらに替わるオルタナティヴを私は示さなければならないからだ。

数年前のクラスで、フェミニズムがネーション、人種、階級の境界を越えようとするときの道義の問題を雄弁に提起してくれた学生がいた。[66] その学生がレポートで書いたのは、「国際的フェミニズムの理論家と批評家たちは誰に向けて書いているのか」と問うことから始めて、次にはこの書き手と読み手の出会いを、書き手である理論家が想像上の対話をできる場となるよう、私たちが再構成してはどうかということであった。そうした出会いに必要なのは、フェミニズムをそういうものとして形成する条件があるかどうかを注視しつづけることだとその学生は論じていた。そしてそうした注視は、道義的共同体形成に必要な根源的な問いの考察を促すだろうとも書いている（このレポートを作成する直前に、この学生が「第3世界・非白人フェミニズム」という運動体グループへの加盟を拒否されるという経験をしていたことを付記しておきたい）。権力的で歴史のある高度にイデオロギー的な共通認識を全面的に無しにする方法はありえない（或るイデオロギーを批判できるからといって、それを無いものとしたり放棄できると思わないように、と学生にはいつも言っている）。そのせいでフェミニズムが苦悶に満ちたものになるなら、この学生が解決策として提起

したように、「この演習クラスでとりくんでいる重大局面はおそらく、ゴールではなく過程、私たちは「どの運動に加盟すべきか」ではなく、「どういう関係性の担い手になるか」」である。この学生は重要なことを言っていたと思う。歴史的諸力を結集させて個人像（たとえばソジュネ・トゥルース）をつくりだすことは、どんな批判的な議論においてもなにほどかは必要なので、道義的政治学における「自己と他者」という問題を提起してもいる。この学生によれば次のステップでなすべきは、私たちのクラスで批判／克服を試みている体制順応的な「国際的フェミニズム」を攪乱するフェミニズム（複数）を主張するときも、グローバル化する政治経済の地平に焦点をあてつづけることだ。そうしたフェミニズム（複数）の未来を導く問いは、未来における新しい地球規模の女性による社会運動から排除されるのは誰か、包含されるのは誰かというものだろう。

【註】

40）[訳者注：「ポストナショナル」という概念はそう一般的なものではないが、『女性学研究』前号掲載の本論文（上）から続く文脈から考えて、「国際的（インターナショナル）」という概念の前提にある「国別（ナショナル）」の枠組みを克服してのちに確立すべきもの、ないしはその展望の意、と考えてよいだろう。]

41）Noël Sturgeon, *Ecofeminist Natures: Race, Gender, Feminist Theory and Political Action*, London and New York: Routledge, 1997.

この演習を開講した最初の数年は、適当な文献があまりなかった。Karen J. Warren, *Ecological Feminism* (London and New York: Routledge,1994) は当初採用したものの、リストから落とした。この本の力は、エコフェミニズムをちゃんとした学問分野にするには何が必要かをはっきりと論じている点である。しかし私が求めていたのは、こうまで方向性を定めてはいない別の批評であった。そこで私が加えたのが、Donna Haraway, 'A Cyborg Manifesto,' in Donna Haraway, *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*, New York: Routledge, 1991, pp.149-181; first published as 'Manifesto for Cyborgs,' *Socialist Review*, 80, 1985) である［邦訳：ダナ・ハラウェイ『猿と女とサイボーグ』青土社、2000年］。というのは、ハラウェイは女神礼賛をひっくり返して、支配の力学を論じているからだ。また次の文献も、非白人女性たちがとり

くむエコロジカルな運動がフェミニズムを必要としていないことを明確に示すものなので、使っている。Giovanna Di Chiro, 'Nature as Community: The Convergence of Environment and Social Justice,' in William Cronon (ed), *Uncommon Ground: Rethinking the Human Place in Nature*, Boston: W.W. Norton, 1995.

42) GAD (Gender and Development) ; WED (Women, Environment, and Development) ; GED (Gender, Environment, and Development) ; UNEP (The United Nations Environment Programme); SWAGSD (The Senior Women's Advisory Group on Sustainable Development) ; FLS (The Federal Liaison Service) ; WEDO (Women's Environment and Development Organization) ; UNCED (The United Nations Conference on Environment and Development).

43) たとえば WEDO は、ベラ・アブズクとミム・ケルバーたちの働きの結果できた。この2人は、国連を通してアメリカ合州国のフェミニスト・プログラムを策定した人物である。

44) Sturgeon, op.cit., p.149.

45) これについては次を参照。ibid., chapter 5, 'Ecofeminist Natures and Transnational Environmental Politics,' pp.135-166. 私は毎年こういう調子でエコフェミニズムを批判するわけではない。1997年には、次の文献を読んで、学生がエコロジカルな危機についての理解を深められるようにした。Dianne Rocheleau, Barbara Thomas-Slayter and Esther Wangari (eds), *Feminist Political Ecology: Global Issues and Local Experiences*, London and New York: Routledge, 1996. スコット他編の論集と同様、政治的エコロジーも関心を「フェミニズムに立つ国際政治」から、グローバル化した経済の地平における「政治的枠組みのなかにあるフェミニズム」へと移している。ただしロシュロー他編の上記書のアプローチのほうは、学生たちをすぐわかった気にさせる。と言っても、学生たちがこの本にあるすべてを易々と理解するわけではない。学生たち自身の文化至上主義的な傾きはじゃまされないままで、書中で提起されている枠組みをすぐに把握できるということだ。ロシュローたちによれば、持続可能な開発政策を求める闘争のテーゼは、「フェミニズムに立つ政治的エコロジーにとって、ジェンダーは、資源へのアクセスと資源コントロールを形成する際の重大要素である」というものだが、これは学生たちの、飛行機の切符さえ買えば「よその女性」への無媒介的アクセスが可能だという考えをいっこうにじゃましない。同書、p.4 参照。

現在の演習クラスでとりあげるエコフェミニズム関連の文献リストは、

とりわけうまくいっている。というのは、第1段階の文献読解でよしとされた学生たちの前提が、第2段階の文献読解では疑問視されるようになるからだ。その前提とは、(1) エコロジルな危機は、ナショナルな／国際的（インターナショナル）な境界を越える領域の問題である、(2) エコロジカルな損傷を問題にすることは政治的経済を越えることである、(3) 女性は均質的集団であり、男性と違って自然的過程へのアクセスを有する、というものである。学生たちはエコフェミニズム的議論から離れることにためらいはないが、文献読解の第2段階で問題になるこれらの前提を信じてもいる。このことは演習クラスの次の段階で非常に重要なので、まず私がめざすのは、理論的な仕事に必要な思考法とは何かを示すことだ。困苦に直面して恐れる替わりに道義的な対応をすることと、どういう表現、論法で抑圧状況を改良するための議論を提起するかを論じることは違う。それを学生が区別できるようにというのが、私がかなりのエネルギーを注ぐ点である。

46) ただし、どのようにして子どもの死が、国際的女性人権を侵害しようという国家の継続的な悪しき意図のせいだとされるのかを学生が把握するわけではない。中国政府と瀕死の子どもを換喩的に結びつけるのは、アメリカのメディアではすっかり標準となっていて、あたりまえすぎることだ。この点をみごとに論じている次の文献を読むようにと学生たちに言っている。Juliette Guilbert, 'Feminism's China Syndrome: How the Myth of the Oppressed Third-World Woman Clouds American Feminist Discourse,' *The Stranger*, August 27, 1998.

47) グルーワルによれば、人権の主張がヒンドゥー教徒結集のためのアジテーションに使われることがある。彼女が挙げるのは、インド国内でシク教徒が行なっているとされる女性搾取に反対するアメリカ合州国在住のヒンドゥー教徒の事例である。（この文献は草稿だが、グルーワルの許可を得て使用している。）たしかに、性器手術という習慣の問題をめぐって女性学領域で行なわれている議論を見ると、「アフリカ」という記号から働く連想は、いまやなにをおいても「よその女性のクリトリス」なのだ。「中国」という記号はといえば、すなわち孤児殺し、胎児殺し、そしてかつての纏足（どれも女性への抑圧）という換喩的連想がどうしても働く。（ピーターズとウォルパーの本にある「暴力と健康（Violence and Health)」というセクションには5本の論文が収められており、80頁を割いてそこで論じられているのは、強姦、強制売春、FGM、ドメスティック・ヴァイオレンスなどである。他方で、「開発と社会経済（Development and the Socio-Economy)」のセクション中で、サブシステンスと労働権の問題を

正面からとりあげている論文は１本しかない。それが次にあげる、フダ・A・セイフがイェメンの社会経済を論じたすぐれた論文である。Huda A. Seif, 'Contextualizing Gender and Labor: Class, Ethnicity, and Global Politics in the Yemeni Socio-Economy.' なおこのセクションはセイフ論文を含めて３本からなり、わずか35頁しかない。）

48) Lynn Thomas, '"Ngaitana (I Will Circumcise Myself)": The Gender and Generational Politics of the 1956 Ban on Clitoridectomy in Meru, Kenya,' Oxford: *Gender and History*, 8:3, 1996, pp.338-363.

49) これが大学院演習であれば、さらに踏みこんで、実は切除を受けているのは「私の」クリトリスではないのかという追究をするだろう。つまり、「よその女性の」クリトリスをもちだしてここで本当に問題になっているのは、「私の」セクシュアリティである。要するにこの問題は、スピヴァクが精神分析学分野のフェミニズムについて批判的に展開する議論でくりかえし登場するものだ。次を参照。Gayatri Chakravorty Spivak, 'French Feminism Rivisited,' in Spivak, *Outside in the Teaching Machine*, London and New York: Routledge, 1993. 私は「よその女性の」健康とセクシュアリティに問題があるとして論じる立場に反対しているわけではない。問題はたしかにある。私が学生に言うのは、次のようなことだ。自分ではない他の女性のセクシュアリティを問題の中心に据えるとき、そのことが、学生たち自身のセクシュアリティを考えるうえで、どういう意味をもつか、その政治的な意味は何か、女性を救うためと称して、植民地統治や帝国主義的搾取を正当化してきた歴史が、どれほど長きにわたるものであったか、といったことを考えないならば、危険な思考に陥る。この種の思考は、切除を受けるその女性が解剖学的に同じ女性であるというだけの理由で、自分は彼女に無媒介的にアクセスできるとする思いこみにつながっている。

50) Homa Hoodfar, 'The Veil in Their Minds and On Our Heads: The Persistence of Colonial Images of Muslim Women,' *Resources for Feminist Research*, 22:3/4, pp.5-18; also in David Lloyd, Lisa Lowe et als (eds), *The Politics of Culture in the Shadow of Capital:Worlds Aligned*, Durham, NC: Duke UP, 1997.

51) Jacqui Alexander and Chandra Mohanty, *Feminist Genealogies, Colonial Legacies, Democratic Futures*, London and New York: Routledge, 1997.

52) ［訳者注：タニ・E・バーロウ「地球規模の枠組みのなかで「国際的フェミニズム」を教える（上）」『女性学研究』９号、2001年３月、pp.37-38。］

53) Charlotte Bunch, 'Transforming Human Rights from a Feminist

Perspective,' in Julie Peters and Andrea Wolper (eds), *Women's Rights, Human Rights: International Feminist Perspectives*, London and New York: Routledge, 1995, p.15. [訳者注：タニ・E・バーロウ、前掲書、注36) 参照]

54) Marie Anna Jaimes Guerrero, 'Civil Rights versus Sovereignty: Native American Women in Life and Land Struggles,' in Alexander and Mohanty, op.cit., p.101-121.

55) Amrita Basu (ed), *The Challenge of Local Feminisms: Women's Movements in Global Perspective*, Boulder, San Francisco and Oxford: Westview Press, 1995. [訳者注：この本にある世界各地の地域主義が国別の（ナショナルな）ものであることについては、本論文（上）で論じられている。]

56) William I. Robinson, 'Globalisation: Nine Theses on Our Epoch,' London: *Race and Class*, 38:2, 1996, pp.13-30. [訳者注：タニ・E・バーロウ、前掲書、p.35 参照。]

57) Honor Ford-Smith, 'Ring Ding in a Tight Corner: Sisteren, Collective Democracy, and the Organization of Cultural Production,' in Alexander and Mohanty, op.cit., pp.213-258.

58) Kannabiran and Kannabiran, 'Looking at Ourselves: The Women's Movement in Hyderabad,' ibid., pp.259-279.

59) 私がカナビラン論文を使うのは、国際的フェミニズムのすべてが国連、ないしは「フェミニズムの NGO 化」という過程（この命名はサビネ・ラングによる）を経由するものとはかぎらないことを強調するためである。ポスト植民地支配の時代に第3世界地域で女性の組織化の歴史を大きく進めた力のひとつに、地球規模で機能した毛沢東主義があった。このことはカナビラン論文を読めばはっきりする。私はさらに、ペルー、フランス、アメリカ合州国における毛沢東主義の影響を受けたフェミニズム運動の情報を付加して、カナビラン論文の補足としている。批判的な理論と実践を伝える国際的ないしは境界を越える運動にはどんな歴史があったかということ、また1世代ほども遡れば、いまや燃えつきてしまった革命の動きが興隆したときのあったことを学生たちに示すのが私の目的だ。ここでアレグザンダー／モハンティ書中にあるアイェシャ・M・イマムの次の論文を学生たちに読んでもらう。Ayesha M.Imam, 'The Dynamics of WINning: An Analysis of Women in Nigeria (WIN),' ibid., pp.280-307. イマムが論じるのは、文化的ナショナリズムそれじたいは、国内諸州の境界が強固でないところでは、包括的な自助プロジェクトといった進歩的なものともな

りうるということだ。文化的ナショナリズムもまた、国際的開発機構のルートなしで世界をつなぐイデオロギーである。

60) Joan Scott, Cora Kaplan and Debra Keates (eds), *Transitions, Environments, Translations: Feminisms in International Politics*, London and New York: Routledge, 1997.

61) スコット書中で、スヴェトラナ・スラプザクとレナタ・サレクルが旧ユーゴスラビアのナショナリズムを論じたものを参照。また「東欧、中欧における女性運動（Women's Movements in Eastern and Central Europe)」のセクションに所収の論文（東独の女性運動に関するマレク＝ルウィ論文、ポーランドの女性運動に関するマルゴーザタ・フスザラ論文、そしてポーランド、スロベニア、ブルガリアほかの東欧についてのミリカ・アンティク・ゲイバー、アンドレア・ピト、クラシミラ・ズカロヴァの論文）に答えて、アン・スニトウが書いた論文も参照。

62) Malek Alloula, *The Colonial Harem*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1986.

63) Yukiko Hanawa, 'Inciting Sites of Political Interventions: Queer'n Asian,' *Positions*, 4:3, Duke UP, 1996.

64) Dianne Hagaman, *How I Learned Not To Be A Photojournalist*, Lexington: UP of Kentucky, 1996.

65) Nell Irvin Painter, 'Representing Truth: Sojourner Truth's Knowing and Becoming Known,' *Journal of American History*, 81:2, September 1994, pp.461-492.

66) 1998年秋に提出されたこの学生レポートの執筆者名、表題は次の通り。Julie Brugger, 'Feminist Conversations in International Spaces.'

【前号掲載の本論文（上）の訂正】

1）『女性学研究』9号、p.47　注9）5行め（誤）*The Politics of Culture in the Shadow of the Capital: Worlds Aligned*;（正）*The Politics of Culture in the Shadow of Capital: Worlds Aligned*

2）同上書、p.55 注37）2行め（誤）Return to the Dying Room;（正）Return to the Dying Rooms

訳者より

この論文は、2001年3月に行なった2000年度第3回コロキウム「地球規

模の展望の枠組みとしてのフェミニズム国際主義を問いなおす」で発題されたタニ・バーロウさんによる論文の後半部分を訳出したものである。いうまでもなく、『女性学研究』第9号掲載の論文「地地球規模の枠組みのなかで「国際的フェミニズム」を教える（上）」の続きである。コロキウムについて、また分載訳出の事情については第9号をご覧いただきたい。

これで上下がそろい、全文を訳出掲載できたので、訳出にあたって注意した点を最後に記しておく。この論文は大学学部レベルの演習クラスでバーロウさんが行なっている教育についての一種の報告であり、そのクラスで使用する文献についての情報はとりわけ重要である。文献表題については、訳出すると書誌情報としての意味を失うので原語のままとした。書物の編著者および論文執筆者の名前は、本文中ではカナ表記とし、注で原綴を確認できるようにした。ただしすでに邦訳が刊行されている単行本1点については（9号掲載分の注13)、15）参照)、本に所収の論文原題をそのまま記しても意味がないので、注でも邦訳書中の論文表題を採用し、執筆者名もカナ表記しかしていない。本号の注41）にあるダナ・ハラウェイ論文は、初出時の表題が変更されて単行本に所収されているうえ、単行本原題と邦訳書名にもずれがあるので、原綴を入れた。

バーロウ論文で書誌情報に不備のあったものは、訳者が調査して正確を期した。また、邦訳刊行の有無の調査は、論文については行なっておらず、単行本についてのみ行なっている。ただし遺漏があるかもしれない。

分載という掲載形態のせいもあって訳者注を付す必要があったが、原注と訳者注を別に立てると煩雑になるので、原文とは違う独自の通し注番号をふったうえで、訳者注はそれと明示して原注と並べた。このほかにも、翻訳作業の過程で細かい修正や変更をした箇所はあるが、すべてバーロウさんのご了解を得て行なっているので、ここでは省略させていただく。

（萩原弘子）